

○桂

春日さき型の竹村おくみえて花敷しるさたま排かな
松杉にまさるよはひは春毎に入千代花さく玉つばさかな

敏 邦
則 直

○わか、つら ○桂がらた

○桂をいゝ ○桂の追風

○わか木のかつら ○若桂の木

○とねのかつら

○月のかつら

○月の中なる桂

○もともらの桂

○かつらの花

○岩もとかつら

○かつらの花

千拾万

○檀

むかつをの若かつらの木しづねどり花待今になげさつるかも
久かたの月のかつらもをるばかりいへの風をもふかせてしがな
みづがさのかつらをうつし宿なれば月みんとぞ久しかるべき
いく代々のあふひかつらに千早ぶる神の契とかけてたのまん
いかにせむ高開の山の雲間より月のかつらのをらぬよそめを
かし

よと人
一ら
菅原大直
成 助
春 満
契 沖

○蕨殿くまかー ○一ちかー

○かーのそのひよりぬけ出て

○さかゆる

○もみち田築

○岡のかー原

○かーの木

○かー原

○かーの蕨

○かーの木ちら

○かーのみ

○ひらり

後万

あし引の山路もしらそ白かしのぬだもとを、に雪のふれ、ば
あし引の山におひたる白がしのしらずや人をくら木なりとも
水えさそこむらばわれを熊かしのしげる葉廣に猶しかせけり

よと人
一ら
重 躬
威 恒

○榧

くぬぎ

○若くぬぎ

○わが門

○へぬぎ原

○ふーくぬぎ

○くぬ木がもと

○大川のべ

○かーのかつら

万 新六 同

わたらひの大川のべの若くぬぎ吾久にあらば妹こひむかも
高瀬ささぎはの川べのくぬぎ原いろつくみれば秋のくれかも
里人のほたさる冬のふしくぬ木大川のべのわれまをもとし
老ゆけを猶との葉のわかぬ木若くはそはひふしもまたまし

よと人
一ら
衣 笠
信 實
青 庵

○楸

ひたひた

○濃ひたひ

○ヌ木いませく

○かーのひた木

○波にーをれて

○楸の末葉

○楸生る川へ

○楸ちる川へ

よと人
一ら

万 同 新

こそ咲し久木今さくいたづらに土にやおちむみる人なしに
浪間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ君にわはせて
君こふとなるみの浦の濱楸しをれてのみも年をふるかな
われみてもとしをつむりの濱楸生そめし世はさうな久まき
わが、へり春の若葉のわか楸久にさかぬむ千代に入千代に

よと人
一ら
俊 頼
春 満
宜 長

○栗

くり

○まかくり

○結ぐり

○かまくり

○風まきて拾ふ

○わかくり

○はらへ

○くり栗

○おひり

○榎ぐり

○つらも

○栗ちりぐり

●雜之部中○桂○榧○楸○栗

同 夫

山風に峯のさへぐりはらくと庭に落くる大原のつゆ

風待てひろふとそれぞ袖のうへにかゝる木かげの露の落粟

ふく風に心おくれぬみかくりのつひには世にもぬけ出にけり

○桑

○くは

○桑葉

○新桑葉

○桑子

○桑の露

○園生の桑

寂 爲 重
蓮 相 威

万

後

たらちねの母の園なる桑も猶ねがへば衣にさるといふ物を

引まゆのかくふたごもりせまはしく桑こきたれて泣をみせばや

里人の今もこくてふ桑原やしげるともみぬ夏木立かな

妹がつむ新桑の葉もあらそへば國のみだれとなるてふ物を

○櫛

しんみ

○一さみの青葉

○一さみの花

○一さみの

○一さみの流る

○みねの櫛

思 信 廣 濱
房 賈 足 臣

新 万

新

新六

おく山の櫛の花の名のことやししく君にこひわたりなん

櫛つむ山路の露にぬれにけりあかつきあさの墨染の袖

あか水に櫛の青葉さうけつてさげもたればぬる、袖哉

明くれのつとめたゆまぬ法の身はつみのこさめや峯の櫛を

今 小 光 寄
成 侍 俊 海

○櫛

むろ

○葉かへむむろ

○根はむむろ

○むろの木

○むろのうま木

○外山のむろ

○櫛のむろ

○浦のむろ

○岩根にたてる

万

同

同

しましくもひとりありうる物にわれや島の室の木はなれて有らむ

磯のうへに根ばふむろの木見し人をいかなりと、はかたりつげんか

軒の浦のいその室の木見んごどにあひみし妹はわすら延めやも

みづなごむろのつま木によりかけて磯山もとに涙ぞわかる、

よと人 旅 同 重
ら 人 威

○合歡木

ねむ

○ねむの木

○ねむりの木

○妹がたま

○ひるは咲る

○よるはぬかり

○ひるもねむり

万

同

新六

ひるは咲きよるはこひぬるねむの花我のみ見んやわけさへにみよ

わきもこが形見のねむは花のみにささてけだしも實にならじかも

山ふかみいつよりねむと名をかへてかうかの木には人まどふらん

いたづらにひるもねむりの花をみよつひにみのなる時どてはなし

紀 家 光 重
耶 持 俊 中
女 持 俊 中

○槻

しんみ

○あしき

○百枝しんみ

○五百枝しんみ

○うきの木

○うきがさ

○うきのかたえ

○落ちらばし

○さか

○月たぬき

○うき

○さか

○たか

万

天とふやかるの社のうはひつひへ世はさからんこもりしはむ

よと人 一
ら 人 威

同

七ノ卷三十二

○柴 しば

どくもてもみてましものを山しろの高規のむらちりにけるかも
君が代は大はつせ路のもゝ規も、枝ながらもさかぬまぞかな
やまとなるかるのやしらのいはひ規いはひつとせぬ世にこそ有けむ

同 俊 朝
璋 朝

- 山の下柴 ○庭のかき柴 ○柴の下みち ○青柴 ○そともの真柴 ○うさ柴
- 山人 ○たきこり ○柴とる ○柴ふ ○木柴のゆき ○よ一柴
- 柴のさかた ○柴車 ○山柴 ○いち柴 ○栗柴 ○あらの真柴 ○ゆきの下柴
- は柴 ○小柴 ○一ひ柴 ○柴柴 ○ま一はたぐ ○柴かる ○あらの真柴 ○うさ柴
- 麓の真柴 ○木々の下柴 ○ちら柴 ○ま一はたぐ ○柴かる ○あらの真柴 ○うさ柴
- 山がっ ○柴の立枝 ○椎の子柴 ○かれ柴 ○ぬれ柴 ○柴の雪折

六百 同 万

○柿 かし

大原のこのいつしはのいつしかど我もふ妹に今よひあつるかも
みちのべのいちしは原のいつもく人のゆるさんとさしるらん
かきはなる山の下柴打なびき人はおとせで秋風ぞよく
山深み椎の真柴を折させ宿には風もたまらざりけり
所せきかまどのけぶりたゆまじきためしなりけりしけるいち柴
君が代のめぐみの露や種ならし山は木柴にさかるとりけり

志賀皇子
よし人
内侍
季經
重威
麗子

- 山がき ○かきの葉 ○かきのまき ○おがやの柿 ○こねり ○かきのもと

○鳥 とり

○さのふのかき ○山里の柿
しめゆひてる山里はよるにのみえさる心のかきみだるらん

鹿 麻 呂

- うく ○水こひどり ○はこどり ○からどり ○まひどり ○あまのしら
- あしづき ○あか ○まーり ○ひたき鳥 ○こがら ○こがら ○あまのしら
- かやぐさ ○庭たき ○みやこ鳥 ○かもり ○山がら ○あまのしら
- よくろ ○ひえ鳥 ○かくる鳥 ○ねえ ○あまのしら ○あまのしら
- 大鳥 ○小鳥 ○ひな鳥 ○から鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- もい千鳥 ○千鳥 ○とぶ鳥 ○かく鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- はなちどり ○ねぐらとる ○入江の鳥 ○むれぬる鳥 ○ゆー ○あまのしら
- あま ○ねぐらとる ○あまの鳥 ○鳥のね ○まーり ○あまのしら
- あしづき ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- 打はら ○ねたけとる ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- はねさる ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- と山たき鳥 ○さぬつとる ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- 島つとる ○水鳥 ○山ざり ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- 川鳥 ○池の鳥 ○江の鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- 千里をかける ○うさ鳥 ○うさ鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら
- もりの鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまの鳥 ○あまのしら ○あまのしら

よみ人
しらす

●籬之部中○柴○柿○鳥

七ノ卷三十三

新六

人ぞしむすめひなの手すれし
いなすめむれわたる也腰のやの門田のひたにてたまやとむる
いながらにすだくそめは葉がくれてまれのこれる穂をや争ふ
なるこ引方はみえねむら雀のりの内より立てまにけり
なるこ引門田のいねのほどもなく立てはかへるむらさめかな

鳩

はら

知家 宣旨 常陸 眞淵

六 金 堀

われを秋とふる露みれば山はどの鳴こそわたれ君まつつ之に
まぶしむらつそのみにもたへかねて鳩ふく秋のこゑたてつなり
とびかける入幡の山の山はどのさくなる聲は宮もどいらに
あふ人もあらし吹しく山里に何しかくよはのなへらむ
おはれなりかや吹影にそほぬれてまばゆかふる雨の夕ぐれ

鷺

たれ

よみ人 一ら 頤 鐘 充 鹿 春 美

- 新六
- 夜
- 雨
- 木末
- 川
- 水
- 鳥
- 山
- 秋
- 宮
- 雨
- 夕

同 六 風

そごさ哉かも川原の朝風にみの毛みだれてさぎ立るめり
高しはやゆるぎの森の鷺さうもひとりはねじをあらそふものを
ひるよりもゆるぎのむりに住む鷺の安さにもねを戀わかしつる
川上のしげみのさぎのねぐらよりやしらみゆく明ぼの、そら
そみた川をさぎに立るしら鷺は涙をやおのが友とみるらん
なには江やひまなまおしはうらがれてさぎのみのけに夕風を吹
雨はる、田づらの川の古ぐみにさぎもみのけをかけてほそなり

鶺鴒

か

- 鶺鴒のたをる
- 鶺鴒のあまの
- 鶺鴒の羽に
- 鶺鴒の羽を

後 六 夫

かさ、さのみねとびこえて鳴ゆけば夏の夜わたる月をかくる、
鶺鴒の羽に霜ふりて寒き夜をひとりやわがねん君まらわびて
月清み梢をめぐる鶺鴒のよるべをしらぬ身をいかせむ
はげしくもふりくる雨さう治川のうしとしらさやわたる鶺鴒

よみ人 一人 入 春

○鷺 山どり

○鷺の山どり ○鷺の山どり ○鷺の山どり ○鷺の山どり
 ○鷺の山どり ○鷺の山どり ○鷺の山どり ○鷺の山どり
 おもへどもおもひもかねつあし引の山鳥の尾のながき此夜を
 ひるは来てよるはわかる、山鳥のかけみる時ぞねはなかれける
 神にこそ契はかはれひるはきて夜はわかる、みわの山どり
 ながくら咲く遠山どりのその、えもくちぬく程ながめのみして

○百舌鳥 もせ

○百舌鳥の草つき ○百舌鳥の草つき ○百舌鳥の草つき
 ○百舌鳥の草つき ○百舌鳥の草つき ○百舌鳥の草つき
 春さればもその草ぐさ見ぬねどもわれはみやらん君があたりは
 もそのなるふるぬの萩も霜がれてあしたの原に秋ぞくれ行
 ちりぬぐさはしの立枝のもみぢ葉にもせの尾ぶりのまたりがはなる
 はじもみぢ風にみだれてちりにしを枝にかへるはもせに予有ける
 かた岡のそばの立木のまりはれて梢あらはにもせをなくなる
 わし

○鷲

○鷲のまじり ○鷲のまじり ○鷲のまじり ○鷲のまじり
 ○鷲のまじり ○鷲のまじり ○鷲のまじり ○鷲のまじり
 ○かきく鷲 ○かきく鷲 ○かきく鷲 ○かきく鷲
 ○かきく鷲 ○かきく鷲 ○かきく鷲 ○かきく鷲

新六 万

つくはねにか、なくわしのねをのみかなきわたりなんあふとはなしに
 又はよく羽をならぶる鳥もあらし上みぬわしの空の通路
 おきつ浪千度くだくる岩角にありあるわしの聲もささむ
 あはれ也澤山のおくにそむわまのおのが羽もてそ人に射らる、
 もの、ふの矢にはへみればわしのはのなれるはてまでゆかしかりけり

○龍 たつ おかみ

○龍のたつ ○龍のたつ ○龍のたつ ○龍のたつ
 ○龍のたつ ○龍のたつ ○龍のたつ ○龍のたつ
 ○たつとお神 ○たつとお神 ○たつとお神 ○たつとお神
 ○たつとお神 ○たつとお神 ○たつとお神 ○たつとお神

万

わがをかのおかみにいひてふらせたる雪のくだけしそらにちりけん
 わやしきもふりくる雨か一すぢにくもばかりころたつとみえしか
 くもあまでのぼる視のみづからもあやしとのみやおもひたつらん
 どのりの海の浪をさかまき月の山こしき崖にたつかけけるみゆ
 浪をたて雲をおこしてふじのねも及ばぬ空にのぼるたつ哉
 久かたの空おそろしき雲の中にくられかみこそあらはれにけれ
 ひそみてもつひにはたつの身をしれと天つ雲ぬにあらはれにけり

○虎

○虎のまじり ○虎のまじり ○虎のまじり ○虎のまじり
 ○虎のまじり ○虎のまじり ○虎のまじり ○虎のまじり
 ○てがひのまじり ○てがひのまじり ○てがひのまじり ○てがひのまじり
 ○てがひのまじり ○てがひのまじり ○てがひのまじり ○てがひのまじり

●藤之部中○百舌鳥○鷲○龍○虎

月六

久かたの月毛のこまを打はやめ來ぬらんとのみ君をまつかな
敷しらぬ玉野の原のはなれ駒どりもつなかなかすまされる世は
うつむちの下よりはせてゆくこまや人の心にはあるにはあるらん
その駒の荷緒かためよわしがらの關のあきたは道もあやふし
くらもあまあふみもさしつわが、ひしかひの黒さまわしどからなん

○犬

うぬ

上み人
季 千 茂 御
經 楯 雄 杖

○家のうぬ ○やまもる犬

○門もるうぬ

○うまき犬

○里のうぬ

○さどびたる犬

○犬のこゑ

○とびぢる

○ねーきーる

○はゆる

○むぎ犬

家六

よふけていそぐまぬたのあたりまでうたてもさらぬ里の犬かな
山里は人の通へる路もなしやどもる犬のこゑばかりして
しづがやは犬にどのへをまもらせて事どもなき世にこそ有けれ
君が代の戸さ、ぬ門の明くれに心やそくもねぶる犬かな
風ふけばなづる柳の下かげにねぶれる犬の夢やいかなる
おのづから戸さしわさる、世にあひて門もる犬ものどけかるらん
ある ましち

○猿

ある ましち

高 定 重 公 興 有
頼 家 義 助 戸 功
頼 家 義 助 戸 功

○友なる

○この猿なる

○山猿

○ほのちる

○三股きく

○子ぎちる

○三かけび

○まけよ

○人まねる

○木の實尋る

○木傳ふ

○月のかげとる

○月影にいのちをかふる

○夜深き雨にちかへ

古六

わびしらにましらな、まじり引の山のかひあるけふにやはあらぬ
あし引の山のため間に妻こふと鹿にもまざる聲聞ゆなり
夕つく日さそやあらしの山本に物わびしらに猿さけふなり
雲かゝる梢ゆそりてなく猿の聲も深葉にくもる空かな
おく山の木の實どりはむさるさらも春は花咲えだにまじれり
大かたはさかしらさなる山ざるも人まねならを子やあもふらむ
子さおもふ道にまじりる山ざるの人にかはらぬあはれをさみる

上み人
同 仲 寄 魚 寄 有
賈 夫 庄 門 功 脚

○狐

まじりぬ

○老きつね

○あまきつね

○のちきつね

○あまきつね

○狐のこゑ

○人まねる

○穴にすむ

新六

人も見ばあなまらしくし老狐いともひるのまじらひなせそ
花をみる道のはとりの古狐かりのいろにや人まよふらむ
霜まよふ枯生のまじり遠近に鳴こゑ寒しなそのしの原
まじりぬなくむかひの岡の夕月夜一むらさきかかれ尾花哉

信 爲 依 正
賈 願 平 藍

○猪

ぬ

○ぶらぬ

○まじりの床

○ひりりふらぬ

○うまき猪

○おるもの床

○まじりぬ

○やまきつね

○高かたきつね

○おのちきつね

○うたてぬかきつね

○まじりぬ

○たけぬ猪

●猪之部中○穴○猿○狐○猪

○龜

おのがすむ國は千里のそなたよりはるへしおののこゝへんかた思ひ 公 蘭

○梅のうらみ ○風下なる ○龜のうらみ ○Eのうらみ ○Eのうらみ ○Eのうらみ ○Eのうらみ

同 万

おのらざが高圓山をせめたれば里にあちこちのび、びぞこれ 坂上郎女

おく山の木末をつたふむ、びのこゑも寒けく夜は更にけり 志賀皇子

むさ、びのかくろふくまのなげれば春積まよふ月の空になく世 衣笠内

○龜

かめ 久 風

○川のうらみ ○大がめ ○池たすち ○淵たすち ○Eのうらみ ○Eのうらみ

○川のうらみ ○かめうらみ ○江のうらみ ○みぢのうらみ ○波路のうらみ ○たからのかめ

○かめのかめ ○かめ一輪 ○持ちたかめ ○かめのかめ ○龜正にいなな ○かめのかめ

六

浪間より出くる龜は万代とわか思ふ事のしるゝきりけり

しづかなる水の心にとどまひて住らんかめの世こそしらね

山よりも深き淵にとどまひかめは世のうらみせせやのがれはつらん

萬代をひとりも龜のためつかな岩長ひめにまひやよせし

兼 菅 資 賀 孫 盛 中 之

時をぬて海に出たる川龜のあそぶやたつの都なるらん

右 功 卿

○貝 かひ

○種貝 ○かたがひ ○一まきとる ○種がひ ○小貝 ○袖がひ

○すたれがひ ○さやちがひ ○からをがひ ○梅の花がひ ○いたや貝 ○われ貝

○ちくちの貝 ○せみ貝 ○花がひ ○ふながひ ○うら打貝 ○なまて貝

○Sの貝 ○蟹の貝 ○うづを貝 ○あはびの貝 ○種がひ ○われ貝

○はまやり ○白貝 ○赤貝 ○みるがひ ○物あらかひ ○あはびの玉

○あはびの玉 ○貝がち ○かひのね ○牛の貝がち ○たの貝がち ○かひの玉

○かひをくて ○かひありて ○貝あはせ ○おがひ ○かひ

○波平のかた ○波平の玉 ○Sの波平 ○おがひ

Sせの海のおまの島津があはび玉とりて後もが戀のしげ、ん

Sとまわらばひろひにゆかむ住の江のさしによるてふ戀わされ貝

はちまはのうへはつれなまうらにこそ物あらがひはつくといふされ

Sせのおまの朝な夕なにかづくてふわはびの貝のかた思して

君が代の長井の濱によるかひはひろふほどさへ久しかりけり

よする浪打もよせなん我こふる人わそれ貝ありてひろはん

おもふ事ありその海のうつせ貝あはでやみぬる名をや残さん

備 尊 師 實 兵 同 同 同 上 人 一 ら ず 道 孫 順 之 衛

蜘蛛

こも ちか かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

○ちか

○かに

○こも

古新六

魚

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

六

わたつみの神のしめける魚ゆきこころなつかれとめすの釣舟

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

○かたつみ

○わたつみ

夫

しろき魚の御舟の中に入しこそ世を治むべきしるし也けれ
あら盃をかくのむ魚やよりくらん風ゆふはふるみ熊野の浦
まがみふる串本浦の朝ぼらけ鯨つくとや怒みだれたる
大君のねもの、濱にとるうをのよりてつかふるわたつみの神
大君の御贄のまけと魚をらも神代よりこそつかへ來にけれ
わたの原よせてはかへる涙のむたかよりかくより魚あそぶ也

○しろき

○あら

○まがみ

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

○大君

同

淀川の底にそまねとこひとらばそとらぎこそねられざりけれ
ゆく水の下なるこひのくるしきはあみの人目をつゝむ也けり
こひこもるはりまの池のみくりこそひかねばたゆれ我やはたゆる
時しあればたつともなれるうろくづの網にもれぬも世中ぞかし
龍の門のぼらん末をいつしかとみ草が下にひれふらそなり
水の面にわをさるこひの末つひにたつの門をもぬかむとぞらん

○淀川

○ゆく

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

○こひ

六

魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

○魚

よみ人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

●羅之部中○蜘蛛○魚○龍○鮠

今古和歌宇比麻奈備

鈴木重胤 編輯

雑之部下

○酒 さけ まくし

- みき ○とわ ○味酒とわ ○ころき ○ころき ○うき酒
- たはれる酒 ○ことなぐー ○あぐー ○一夜酒 ○かきゆきひ ○八一を折の酒
- もりの酒 ○菊の酒 ○きびの酒 ○天のたむ酒 ○きひの豊酒 ○豊みき
- 大みき ○かきみぞくち ○酒ほぢひ ○ひじり ○ひじり ○竹の葉 ○酒さちば
- 酒みぢひ ○酒ほね ○ひじり酒 ○さかひ酒 ○かき酒 ○くーの神
- のち ○こち ○あぢ ○あぢらき ○かみ酒

記 ぞみりが、みしみに我あひにけりことなぐしあぐしに我酔にけり
 同 するしなきものおもはきは一つきのにされる酒をのむへかるらし
 同 わたひなき寶といふともひとつきの濁れる酒に豈しかめやも
 同 いはむとせんとせしちにきはまりてたふともものは酒にしあるらし
 同 なたしはもかたよりさけのあひ心ゆくにまかせてあそびのみこそ
 同 しばしこそつきのかきをもかぞへつれおほえきなりぬいくめぐりとも
 同 君が代は八百萬代といはひへにた、ししみるは神もうくらし
 同 おもふあぢらきさしるさきのみかはしわかき心のほどもみえけり

輕島宮御製
 旅 人
 同 同
 同 同
 安 守
 茂 岡
 周 平
 深 夫

から詞やまをこぼせばたてぬるにあらばうゝなまを錦ならまし 千 章 陸 澄

綾 あや

後

○くれはにりあや ○紫陽のあや ○ねり出るあや ○水のあや ○あやのみまー ○あやのみま
おもつともあやなしのみのみはるればよるの錦のこゝろこそあれ よみ人 一 ち ず
世にはかく立るまじらでてふ鳥のあやに昔の春をみるかな 廣 海
くも鳥のあやをさなからあらはそやこはたがはたにおればなるらん 春 海

襷 たすき

○玉だまき ○あぶたすき ○かけぬ時あゝ ○かくる ○かけまゝ一帯 ○かむなれか可て

万

玉だまかけねばくるしかけたればつぎてみまゝのほしき君かゝる よみ人 一 ち ず
玉だまの心にかけてしのぶには神代のおとづうれしかりける 光 彦

帯 おび

○玉の帯 ○石の帯 ○ゆはだの帯 ○かけ帯 ○井山の下帯 ○紫のこりめの帯
○紅のこ染の帯 ○かほの帯 ○布帯 ○こ染の帯 ○花田の帯 ○下の帯
○三重の帯 ○ゆひたれ ○ゆゑ ○ゆひまはす ○露の下帯 ○氷の帯
○ひだち帯 ○一つはた帯 ○ゆづりあふ ○むすぢ ○とくる ○とくる
ふにしへのしづはた帯をむすびたれ誰ちふ人も君にはまはさじ よみ人 一 ち ず

新 古

下の帯のみちはかたぐわかるとも行めたりても逢んどぞねもふ 友 四
あしのやのしづはたおびのかたむすび心やそくも打とくる哉 定 良
むかしより名だかさ帯のうしろ手のさしもそがたのよそほしき哉 青 庵
人とはかしまの帯のうらおもて見わかぬばかりむすば、れり、

紐 ひも

○くれひも ○下ゆひも ○小車錦の紐 ○さくらがた錦の紐 ○雲の下ひも
○花のまひも ○赤ひも ○ひものとぢめ ○かたひも ○ゆはだの紐
○ひもさき ○うらひも ○下ひも ○片結びあす紐 ○中のひも
○あすぢ ○あぢ ○むすぼられ ○あぢぢ ○あぢ
○とくる ○とぢめ ○たーきの紐 ○ちひかやみ ○とくる

紀 さらがたにしきの紐をとぢまけてあまたはらねとたゞ一夜のみ 九 崇 天皇
つくしなる匂ふ子ゆゑにみちのくのかとりをどめのゆひしひもとく よみ人 一 ち ず
よろにしてこふればくるし入紐のおなじこゝろにいらむとひてむ 同 満
かそめるもえならぬ花のひも鏡のどかの山の春のけしきに 春 満

緒 と

○玉の緒 ○あぢぢ ○うがねぢ ○あぢぢ ○うちぢ ○だだぢぢ
○琴の緒 ○すゞの緒 ○さめの緒 ○駒のたれぢ ○駒のたぢぢ ○末の緒
○中のほぢぢ ○はひの緒 ○みづの緒 ○うみぢ ○うらぢぢ ○ひの緒
○あすぢ ○とくる ○四の緒 ○たぢぢ ○あぢ

●緒之部下○綾○襷○帯○紐○緒

○たゆむ

○くる

八之巻二十二

夫古方

○糸

玉のを、あわをによりてむきればたえて後にもあはんとぞ思ふ
かた糸をこなたかなたによりかけてあはせは何をたまたまのどにせん
まじ高み駒のたなまの打はつて長き日あかきくる、そらかな
ぬれさぬをぬひにのみぬふつはりに人はこゝろの緒をぞぞぎ、る

紀女郎
よみ人
しらす
知家
長流

○からすと

○かたさと

○桑子のさと

○花田の糸

○夏引の糸

○わくての糸

○手引の糸

○手染の糸

○麻引糸

○麻のうみ糸

○あわ糸

○むぎや

○みだる

○よりあき

○たゆる

○あけ

○願の糸

○あけさと

○うみ糸

○うみはた糸

○あわ糸

○かゝがたの糸

○うりのさと

○柳の糸

○漉の糸

○あわ糸

○あけ

○なまき

○みじかき

○打は

○あわ糸

○糸く

○き華の新糸

○氷引のあはせの糸

○打は

○あわ糸

○糸く

○き華の新糸

○氷引のあはせの糸

○打は

○あわ糸

後古万

河内女が手染の糸をくりかへしかた糸にあれどたえんとおもへや
夏引の手引の糸をくりかへしてどしどしげくともたえんとおもふな
つるよりうとくなりにし夏引の糸はたえてもかひやなからん
ひと心みなしら糸のいろくはそめてみたる、はてどしらぬ
打みたる糸よりもなほどけがたみむまば、れたる人の心は

よと人
いらや
同
同
忠貞
春満

○綿 わた

○つくーのわた

○桑子の新わた

○一重わた

○わたのたね

○から人の種てーわた

○衣のつまわた

○雪のよじわた

○菊のませわた

○わたのたね

○から人の種てーわた

新六

白ぬひのつくしのわたは身につけてしまははさねとわた、かにみゆ
駿河なるふじの桑子の新わたは高根の雪の色に似るらし
わたさはにみつぐにするし白ぬひのつくしも年はゆたかきりけり
秋風にさめる新わたどりつみて雪山つくる品中のなま

満
為家
弘訓
春門

○髪 かみ

○朝ねがみ

○はぐたれ髪

○朝髪

○ねみだれ髪

○白かみ

○くろかみ

○ひたひがみ

○ふり分がみ

○打たれ髪

○みせりの髪

○よもぎのかみ

○つくもがみ

○やぎぎのかみ

○ちぢがみ

○みるふら

○ちぢうのかみ

○真白髪

○いらかみせでた

○ちぢる

○かきやる

○つらる

○ちまほ、れ

○せぢ

○みだれ

朝ねがみわれはげつらじうつくしき人の手枕ふれてしものを
わきもてがねぐたれがみをさる澤の池の玉藻とみるうかなしき
けふみればしどろにみゆる山かげのおどろのかみも装つけたり
げちかぬるかしらの霜やうさ筋のかさなるたびにおきとほりけん

よみ人
いらや
入呂
俊頼
寛光

○髪 かみ

○玉かみ

○花のかみ

○初花かみ

○花かみ

○髪のかみ

○あやのかみ

●髪のかみ

八之巻二十三

○まじりて 〇日影のかりし 〇ちかづきのかりし

わきもこがわぎとつくれる秋の田のわさ穂のかづらみれどわかぬかも 家持
まどらまのふしむ敷をつくりたるしだり柳のかづらせわぎも よみ人
うなる子がとさびにかくる稻かづらおち穂拾ひしかへさなるらん 深臣
未遠世の神わざにうつゆふの正木のかづらかけはじめけむ 春満

○挿頭

〇かきりの玉 〇玉のかきり 〇かきりの花 〇千年のかきり 〇君がかり 〇櫻がかりて
〇またつものかきり 〇あかじかきり 〇かきりさる 〇うすにさす

万 いにしへに有けん人もわがとどやみわのひばらにかさしきりけん よみ人
同 る、しきの大宮人はいとまわれや梅をかきしてこゝにつぎ入り 一らす
同 わたつみのかきしにさしていはふも、君がためにはさしまぎりけり 同
同 千代祈る君が、さしにもとむればかねの枝より花を咲ける 同
同 わたつみの涙もてゆへるはし立のまつをかきしに手折つるかな 眞淵
同 神さぶるみわの檜原に立まじりかきし折けむ昔とはや 春海

○櫛

〇山鏡ふるく 〇まぐり 〇玉のまぐり 〇うたのまぐり 〇うたぐり 〇まぐり
〇筑紫く 〇わかれのく 〇あしきまぐり 〇くまの櫛 〇まぐり 〇まぐり
〇まぐり 〇櫛のまぐり 〇まぐりのまぐり 〇うたのまぐり 〇まぐり 〇まぐり
朝づくるむかふつげくしふりぬれど何しか君がみれどわかぬ よみ人
一らす

後 万 にはがた何にもあらぬみをつくしふかき心のしるしばかりぞ 玉淵女
六 六 あしのやのなだの鹽やさいとまなみつげの小櫛もさゝぎにけり よみ人
六 さしむしやさしむ久しき例とてうつぎの宮にけふたまふなり 春一ら

○櫛寄

〇玉くしげ 〇花くしげ 〇あくる 〇また 〇や 〇明てたて 〇びらく
わがおもひを人にしらすや玉くしげ開わけつと夢にしみゆる 笠女郎
をとめ子が玉くしげなる玉ぐしのめづらしげんも妹にわはさあれば 藤原大夫
君にどしおもひかくれば鶯の花のくしげもをしまぎりけり 伊勢
六 君久しそのかみこそはしのばるれ手馴のくしの明ぬくれぬと 清風

○枕

〇こも枕 〇敷たへの枕 〇手枕 〇新枕 〇袖まくら
〇はつほの枕 〇朝ねがみふれ枕 〇石のまくら 〇いはまくら 〇岩根のまくら
〇小夜枕 〇初穂の枕 〇玉鏡の枕 〇むさぶ 〇笹まくら
〇花のたまくら 〇月のまくら 〇枕かる山 〇むさぶ 〇ゆふ
〇あやめの枕 〇菅枕 〇まくらの夢 〇かや枕 〇草枕
〇霞の枕 〇うき枕 〇かき枕 〇あちの枕 〇松がね枕
〇あまぐら 〇かやまくら 〇さあまくら 〇枕のちり 〇あれまくら
〇枕づく 〇枕まく 〇枕まじり 〇あまの枕 〇うままくら

●籬之部下○挿頭○櫛○櫛寄○枕

○琴 和琴 箏

おもしるる手には心のつながれてわさるゝとなぬかたのび也けり
あくとなく打くらせども一年の日敷を石のかきになしけり
ねもしるる手にもまげしの争ひに何ぞ、ちぎる打わさるらん
末つひに十はた三十とよむ石のかきよりしげぬ思やわつち

大 重 老 雅
依 平 隆
千 隆

- 手あはれのこゑ ○正の緒琴 ○琴のたぶ ○手の緒 ○米の緒 ○持の緒
- うららみささやうの甲 ○うららみささやう ○一さし ○持の緒
- 松のしらす ○水の一さし ○波の一さし ○月の一さし ○春の一さし ○秋の一さし ○琴の緒
- 中のほろ緒 ○琴のねのうららみささやう ○春の一さし ○秋の一さし ○琴の緒
- 緒をけり琴 ○うららみささやう ○月の一さし ○春の一さし ○秋の一さし ○琴の緒
- うららみささやう ○天のうららみ ○うららみ板 ○うららみささやう ○うららみささやう ○うららみささやう ○うららみささやう
- うららみささやう ○うららみささやう ○うららみささやう ○うららみささやう ○うららみささやう

後古万
後拾
こと、はぬ木にはわれどもうるはしと君が手馴の琴にし有べし
わひ人の住るやど、みるなべに敷くは、るこのねぞる
あし引の山水はゆきかよひことこのねにならなる入らなり
あふ眼の關のあなたもまだみねはあつちのことしられざりけり

大 伴 卿
宗 貞
實 之
匡 衛

六 續 金

ことのねは月のかげにもかよへばや空にしらすのそみのほるらん
たけくまの松の風にかよふらむあつちのことこのねこそ聞ゆれ
あつちこと春のしらすをかりしかばかへし物とはおもはざりけり
古のよ竹のことにまげしをばらかななるふしにしらすをなしけむ
かさならん水のしらすも若こゑ夕風かよふ軒の妻ごゑ
大八島國の名おへることこそ神代のまゝのねはこのうけけれ
あふ眼あつちまてふ名のつま琴は清水にこゑのかよふ也けり

○琵琶

- よしの緒 ○あつちの月 ○うららみささやう ○持の緒

大 英 重
平 清 老
眞 千 吉 廣 伊 爾 越
淵 隆 順 足 勢 綱 後

○管絃

- うららみささやうのあそび ○うららみささやうのしらす ○うららみささやうの琴 ○琴のねも竹も ○うららみささやうの音

後 千
ことのねも竹も千年のことぞるは人のおもひにかよふ也けり
ふえ竹の夜ふかき聲ぞよこゆなる茶の松風吹や添らん
君安くおはしますとばいと竹のみわそひの音に民やしららん

實 貞
齊 信
純然法親王

拾万

○漁

あだ人のやな打わたを瀬を早み心はおもへどたににあはぬかも
やなみれば川風いたく吹時ぞ浪の花さへ落まさりける
どかくしてはかりし梁をやする、は思の外のぬものなりけり
いさり あさり

よみ人
ら
海之

六万

○釣

山のはに月かたぶけはいさりするあまのともし火沖になづぶ
大空にあらぬものから川上に星かきみゆるかたり火のかけ
暮わたるいはやがはなの浪間よりあらはれそむるあまのいさり火
いさり火のかけかそかなり夕なぎにいせそのあまや舟出しつらん
つり

よみ人
ら
景之
道

同 同 万

風をいたみ沖つ白浪高からしあまのつり舟濱にかつりぬ
むこの浦のにはよくあらしいさりするあまのつり舟浪の上ゆみゆ
さ、並のひらの山風浪ふけば釣するあまの袖かへるみゆ

角
戸
呂
よみ人
ら
同

後

○天皇

とめらぎ

いせの海のつりのうけなるさまなれを深き思ひは底にしづめる
をとめ子が常世にいざとさふまで春の汐ぞにつりたれてみん
つりの糸のはそき手業につながれてとめはとまる、世にこそ有けれ
大なるさがみのささの夕なぎにみだれて出るあま小舟かも
なごの浦の盤瀬にかゝるつり舟のはのかにみゆる秋の夕ぐれ

千
千
千
有
功
卿
淵
浦
盛
恒

○あまつ神のこ

○天つ神の御子の命

○大君

○わが大君

○あみー、吾大君

○大君は神にませば

○あまつ神

○日のみ子

○天つ日繼

○あまの日繼

○天下ろーめ

○天地ときほみき

○たかみくら

○天つ高みくら

○とほつかと

○避をゆるぎ

○うつの御手

○御門

○代々のみかど

○御世々々

○大御世

○中今の御世

○御代ろーめ

○大君にまづるものど

○大御門

○くもりなき天つ日繼

○久かたの天つ日繼

○をす國天の下

○君

○君が代

○君が大御代

○神ながら

○天地にたらしめて

○かけまくもあやにか

○あやにか

○皇神のつぎに給へる

天地をてらそ月日のさはみなく有べき物を何かおもはむ

淡路天皇

大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりするかも

八
戸
呂

山川もよりてつかふる神あがら瀬つかふちに舟出せずかも

同

○うきめをみつのまま ○花の袂を打かへり ○花の袂を打かへり ○花の袂を打かへり

古 我を君なにはの浦に有しかはうき目をみつのあまとなりなる
れどにさく松が浦島けふぞみるうへも心あるあまはとみけり
そのかみの玉のかざしを打かへし今は衣のうらさたのまむ
あはれ也たけにあまうし黒髪のいろのみのこる墨染のそで
○仙人 やまびと

新 後拾 万 ○春秋もいらぬ ○春のふらたを ○雲なきが ○かすみきへらち ○まことの國
○まこくた ○まことのうき ○松とらまの ○高きまむ ○まことの山

としへに夏冬ゆけやかは衣あふきはなたぬ山にそむ人
春秋もしらで年ふるわが身かな松とつるとのとしをかぞへて
春秋もあらぬときはの山聖はそむ人さへやおもがはりせぬ
山人のまなぬくそりとのむ酒やうき世の外の色にうつらむ
たつ雲もよの常ならせみゆるかなこや山人のそみかななるらん
いひしらぬ春のそがたを三千年のも、の園生にわれやまぬらん
○行客 みちゆきびと

○野ゆく ○まのゆきまむ ○道すがら ○旅ゆく人 ○たしむ

よみ人 兼盛 元方 幸年 正徳 有功 卿

後拾 ○みちのゆくて ○行せりの袖
道そがらちらぬばかりにふる袖のたもとに何をつ、むなるらんむ
いつとなきをぐらの山のかげをみてくれぬと人のいとくなる哉
しらくものよそにみえぬる山のはを月と、もにもこゆる夜は哉
いくたびかひとつ流を右になし左になしてけふは來ぬらん

新 ○匠 たくみ ○飛だの人 ○宮つくる ○たしむ

可 ○木だくみ ○石だくみ ○飛だのたしむ ○こぎの ○まのまむ ○宮つくる
かにかくに物そおもはせひた人の打墨なはのたい一そぢに
宮つくるひだのたくみがてをの音のほとくしかる目をもみる哉
神の代のまなしかたまもあし舟もつくりいつべき竹だくみ哉
そみなはの正しきをぢをつたへきはあらぬ工をなそなひだ人

よみ人 兼盛 元方 幸年 正徳 有功 卿

万 ○商客 わさびと ○市にたつ ○うる ○うりかふ ○かふ ○うきにかふる ○まはや ○まはや
西の市にたひひとり出てめならはせかへりしきぬのあきじこりかむ
四方の國しづかなる世も市人のさわぐにつけて思ひしる哉
海山とさちをかへしや干早振神代のあきの始なるらん
その葉さへかれせぬ市の桶にみのなりはひやたぐへみるらん

よみ人 兼盛 元方 幸年 正徳 有功 卿

○樵夫 きこり

●雜之部下 ○仙人 ○行客の匠 ○商客 ○樵夫

傀儡 くわい

- 旅やかた ○旅の友 ○一夜あかす ○うかれてあつて○やまがりさめ ○野路のたびね
- くれがたの空 ○河童の ○液のよるく

一夜かた野上の里の草枕むそび捨たる人のちぎりを
鏡山雲にわかる、あか星のわからざるなる身のちぎりかな
今どしる野上の里の朝露はたひ行人のなみた也けり
定めなくなびく野上のしのぞいさくうの人の枕かるらむ

遊女 妓女 うかれめ たはれめ

- うきたる契 ○波の上結ぶ契 ○一夜まき ○ひと夜あかす ○うきふね ○波をくち
- 跡もどくめ ○月たうたひてこや舟 ○よるく定あす ○よせてはかへる ○たれとなく
- あそびめ ○たはれづき 母

しら浪のよるなきに世をつくそあまの子なれば宿も定めそ
ひとりぬのこよひも明ぬたねとしもたのまてこそはこぬもうらみめ
おもしろくまつとうたへどかなしきは世にうかれめの心也けり
花紅葉折にふれたる手遊びも色をならふと人やみるらん
あさなくむかふかみにいづはりのうつらばいかにやがしからまし
明くれに人のうきのみなぐさめて何になぐさむうき身なるらん
女郎花うしろめたささみせがほになまめさ立るあたくらふ哉

よと人 一らず
為 忠
母 樹
久 胤
直 登
美 脚
桐 呂

親 おや

- おち ○おちの母 ○おちの父 ○おちの母
- おちの母 ○おちの父 ○おちの母 ○おちの父
- おちの母 ○おちの父 ○おちの母 ○おちの父
- おちの母 ○おちの父 ○おちの母 ○おちの父

春草は後ばかれ安しいはほなきとまはにひませかしてさわが君
一世には二たびみえぬ父母をおきてやすがくわがわかれきむ
とぎくの花はさげさるなほを母とふ花のさかてこせけん
千早ふる神のみ坂にぬきまつりいはふのちは母父かため
人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
父母はわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子
たらちねの親の心を子を思ふて、ろづかひにたぐへてぞしる

市原王
徳 貞
兼 男
兼 輔
宣 長
盛 杉

子 孫 こひこ

- おちの子 ○おちの子 ○おちの子 ○おちの子
- おちの子 ○おちの子 ○おちの子 ○おちの子
- おちの子 ○おちの子 ○おちの子 ○おちの子
- おちの子 ○おちの子 ○おちの子 ○おちの子

白がねもこがねの玉も何せんにまされる寶子にしかめやも
こと、はぬ木をら妹とせありとふをた、ひとり子に有が苦しむ

徳 貞
市原王

●羅之部子 ○傀儡 ○遊女 ○妓女 ○親 ○子 ○孫

古 後 後拾

世中にあらぬわかれのなくも哉千代もといのる人の子のため
なでしてはいづれともなく匂へともかくれてさくはあはれ也けり
浅ぢふにあれにけれどもふる聖のまつは木高く成にける哉
年へぬる竹のよはひをかへしてもこの世をながくなさんとぞ思ふ
色に香にまだたどりなきみどり子も母てふ花のかげや戀しき
しろがねもこがねもしらぬみどりこは母のちぶさや寶なるらん
なにどなく打あむかほにみどりこの老ゆく末の色はみえけり
かぎりなくかなしき物はみどり子の乳こふ夜はのねぢめ也けり
まのこ

業平 太政大臣 内大臣 冷泉院 美隆 信昌 廣足 春夫

同 男

○女

まのこやもむなしかるべき万代にかたりつぐま名はたてきして
これやこの倭にしてはわがこふる木路にありとよ名にねふせの山
もろこしにまむてふとらもこふしもて打ひしぐま男もぞおもふ
まみな

徳良 阿閉皇女 正直

同 男

ふぢ原の大宮つかへあれつがむぢもあがともはともしつるかも
川のべのゆついはむらにこびむまきつねにもがもなとこきとめにて

よみ人 吹花刀日

・秋風をうちもたのまばをみなべしみつにしたがふ末やたがはん
たをやめの人もなげなるよそほひに心たかさもあらはれにけり

芳村

○老人 老翁 かいびと おきな

- たゆる ○老らく ○老が身 ○老の世 ○老の浪 ○老の坂
- 老ぼれ ○老さくら ○老のねぶり ○老のぬき ○友なき老 ○老にける身
- 一らぬ翁 ○みつわむま ○翁さび ○老のそさ ○まれのよせ ○ふりたる翁
- かいらの雪 ○霜のいら髪 ○いら髪 ○わが世ふけ行 ○山より高き翁 ○おきらの髪
- 霜の上まき ○もとのひの霜 ○老のかず ○まーきつむ ○昔がたり ○ふる人
- 老ののり ○世のなが人 ○あが人 ○ふりたる翁 ○霜の翁 ○老のちから
- 老のいのち ○老ぬる身 ○老となる ○まーちが ○いらがままで ○老のつま木

よみ人 いらを

万 古 後 同 金 新 代

物みなはあたらしきよした人ふりぬるそこれよろしかるべき
世の中にふりぬるものはつこの國のながらの橋とわれとありけり
翁さび人などがめそかり衣けふばかりとぞたづもなくなる
としふればわがくる髪も白川のみつめぐむまて老にけるかな
としふればわがいたまきにおく霜を草の上ともおもひけるかな
あし引の山下水にかけみればまゆ白たへにわれれいにけり
しるや君はしをいたく年ふりて我よの月も影たけにけり
老ぬれば心をさなくなりぬるを若がへれりと人のいふらむ

同 行平 楢垣 仲實 能因 後京極 清香

月花のむかしがたりも世にわはぬおきなとど、や人の開らむ
くもかゝる山どはならでちの身のとしのみ高くつもりぬるかな
老めてふみゝるためにうれしきは魔ごとのねぢめなりけり
美 久 隆
臣 胤

友
○友がき ○友たち ○友ぢち ○心の友 ○たてなき ○たてぬ
○まほし ○まほし ○一たし ○おもふ友 ○おもふ友
かたらはんふしもあらぬゆきかふや相思ふぢちの心なるらん
中々に詞まれなる圓のかなおもふかきりはかたりつくして
おもふ友あらばうれしき世ならましありのそさひは有世ながらに
真 尚 賢
淵 忠 臣

遠情
○くも空 ○運き雲路 ○千里の外 ○運き坂 ○ほるかきる ○ほのかなる
○まじり ○ゆくこころ ○おもひけたつ ○おもひけたつ ○ほるまき ○ほるまき
○月 ○雪 ○花 ○もみぢ ○おもひやる ○おもひやる
あしゆゆく鴨の羽がひに霜ふりて寒き夕は和しおもほゆ
わがせこはらづくゆくらん奥つ物なばりの山をけふかこゆらん
ふる里の板間のかせにねぢめして谷のあらしおもひこそやれ
おもひやる千里の外の秋までもへだてぬ空にそめる月かげ
おもひやる心の道の海山はみぎる所をかきりなりけり
深 俊 定 麻 志
重 光 順 呂 貴
皇 臣 順 妻 皇 子

眺望
ながめ
○打わたす ○見わたす ○かきりなき ○ほるかきる ○ほのかなる
○千里の空 ○まめにまがみ ○空をかきり ○はてこころへぬ ○野 ○まがめたくる
○海 ○川 ○こるがうちだ ○こるく ○目路遠く ○霞の関より
○野も山も ○浦の浪間 ○はなれたま ○を花が末に ○ほのみえて ○霞
○まりのたねま ○浪間にみゆる ○運山 ○むら山 ○そらかた ○夕けぶり
○きり ○朝まき ○朝ほらけ ○夕なき ○山もくへ ○海ごりの山
○浦のけぶり ○あまのたまや ○海原 ○青海原 ○なみぢ ○海ごりの山
○山もとの里 ○またる白鷺 ○いさり火 ○つり舟 ○末の川浪 ○ふもとの里
○島かくる ○沖の小島 ○いさり火 ○つり舟 ○末の川浪 ○ふもとの里

なよわらしふくらむかたの空とへばまつにこたへてあはれそへけり
古郷にあらぬ物から月花に都の空をおもひやるる
桐 麻 臣

眺望
ながめ
○打わたす ○見わたす ○かきりなき ○ほるかきる ○ほのかなる
○千里の空 ○まめにまがみ ○空をかきり ○はてこころへぬ ○野 ○まがめたくる
○海 ○川 ○こるがうちだ ○こるく ○目路遠く ○霞の関より
○野も山も ○浦の浪間 ○はなれたま ○を花が末に ○ほのみえて ○霞
○まりのたねま ○浪間にみゆる ○運山 ○むら山 ○そらかた ○夕けぶり
○きり ○朝まき ○朝ほらけ ○夕なき ○山もくへ ○海ごりの山
○浦のけぶり ○あまのたまや ○海原 ○青海原 ○なみぢ ○海ごりの山
○山もとの里 ○またる白鷺 ○いさり火 ○つり舟 ○末の川浪 ○ふもとの里
○島かくる ○沖の小島 ○いさり火 ○つり舟 ○末の川浪 ○ふもとの里

なにはとをこき出してみれば神さぶる生駒だかねに雲をたなびく
玉つしま見れどもあかきいかにしてつゝみもてゆかむみぬ人のため
天さかるひなの長路ゆ戀くれば明石の門より倭島みゆ
天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも
かきこしの山の上にてみる時は雲は麓の物にぞありける
わたの原沙路はるかに見わたせば雲と浪とはひとつなりけり
時しらぬ山は不二のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらむ

三 成
よみ人
人 麻 呂
仲 麻 呂
家 經
順 輔
業 平

新 千 同 古 同 同 万

同 勅 代

若の浦を松の葉ごしにながむれば梢によどるあまのつり舟
 わたの原浪とひとつに熊野の浦の南は山の端もなし
 みわたせば夕日ぞのこる住吉のさしにむかへる淡路島山
 はりまがたせとの入日の末はれて空よりかへるおきのつり舟
 たきの音も間遠にくれておく山のいははにのこる夕日影哉
 萬代になるとの海にたつ浪の底より出ぬ朝日かげかな
 二見かた明るあしたの庭をよみふじのね遠くみさけつるかな
 わたつみのはての遠山はのかにも入日のかげにあらはれにけり
 ながむれば夕暮深く成にけり外山のおくのまつのむら立

寂 通
 入道前大政
 家 隆
 眞 淵
 俊 子
 廣 海
 千 枝
 嬰 雄
 久 秋

○旅 旅宿 旅行 歸中 たび

- 旅だち ○旅のいそぎ ○旅のしづき ○旅枕たび ○草枕たび ○草まもり ○旅衣
- 山分衣 ○旅のとも ○旅枕 ○かりね ○かりねの床
- 松がね枕 ○岩がね枕 ○さし枕 ○朝たろ ○朝たろ
- 草引ひすゑ ○草むら ○衣かた ○かたー袖 ○みやこしら
- 山をこる ○野を分る ○岩根ふち ○ひなの長路 ○行くる道 ○みやこの空
- 一たはーき部の山 ○國おもほゆる ○家路 ○ゆきやち ○野へのかりづー ○木陰にやそらふ
- S2山 ○山松かげ ○並木のかげ ○並まり ○旅ぬ ○一夜の宿
- やどいび ○とけてね ○おれしひ ○日敷ゆー ○つく海山 ○朝たごのふ
- 朝ゆく旅 ○曉おき ○浦分衣 ○うちらえひ ○道行けれ ○野くれ山くれ

万 同 同 同 同 古 拾 後拾 千 同 新

枕のあらー ○馴ぬあらー ○かりねの夢 ○みやこの夢 ○岡のかや根 ○里どひかぬる
 ○雲にやどかる ○かばる野山 ○かばるあらー ○手向の神 ○手向する ○とちのちまた
 ○ちまたの神 ○むさぼ ○さりぬき ○ゆきけぶり ○里のーるん ○つかる道
 ○あゆたつくり ○國 ○ふるさと ○家人 ○家路にいそや ○心あてなる山 ○かき出する
 ○つしがさく ○つゝみなく ○眞幸く ○まぢ酒 ○かき出 ○かき出する
 ○かへる ○關ふく風 ○關こゆる ○關の入重山 ○旅のつと ○家つと ○家つと
 ○旅路のなやと ○物こいーき ○家なる妹を ○おもふあたり ○おもふうち ○なびき一妹を
 ○まつらむ人 ○ほーきこらほも○ゆく

山越の風を時じみぬる夜ねち老家なる妹をかけてしぬひつ
 家にあれば箆に盛る飯を草枕旅にしあれば稚の葉にもる
 岩代の濱松がえを引むそびますさてあらば又かへりみむ
 天さかるひなに五年をまひつ、都のてふりわをそらえにけり
 秋の野にやどる旅人打なびきいもぬらめやもいにしへおもふに
 かりくらま棚はたつめに宿からむ天の河原に吾はききにけり
 旅ゆけば袖こそぬるれる山のしづくにのみはねふせざらなむ
 さ夜更て峯のあらしやいかならん汀の浪は聲まざるなり
 かり衣袖のなみだにやどる夜は月も旅ねのこ、ちこそそれ
 かくばかりうき身のはどもわをられてなほ戀しきは都なりけり
 みるま、に山風あらくしぐるめり都もいまは夜寒なるらん

軍 王
 有馬皇子
 同
 同
 入 麻呂
 業 平
 よみ人
 道 濟
 崇 徳 院
 廉 圓
 太上天皇

同 同

八之巻六十

なには人あし火たくやに宿かりてせいろに袖の盡たる、かな
 としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさ夜の中山
 大君の命かじこき玉藻なまなびさねしこそおきそきけり
 都出て露をいかにとおもひしにしぐれふる也宮城野の原
 やどるべきさとのけふりもみえなくにおほえそくる、旅の空かな
 わきも子がまゆ引なせるふる里の山の端みえてさづる月かな
 かぎりなく血木の松の見ゆるかな嵐の下に日をやくらさむ
 きのふまでたえくみえしふる里の山にもけふは別れぬるかな
 おもかげのわそらるまじき朝日かな生田のわくの有明の月
 朝まだきたのみし月の影さえて遠ざかりさぬまつのはら立
 草まぐら露をあるじとやどかればしらぬ野山もねなれにけり
 岩がねのなれぬ枕も有ものをいたはりしらぬみねのまつかせ
 ふるさとの夢のさかひに入まじの旅ねの枕ふくあらしかき

○旅泊

ふねのどまり

- 一ほのまほり ○うら波さばや ○とまり舟 ○かぢ枕 ○磯まぐら ○液まぐら
- うきね ○大舟 ○うら波 ○小舟 ○うきねの波 ○一ほかぢ
- うきねの枕 ○磯ね ○おらさせ ○磯のうねね ○舟まぐら ○みやこの波
- 八重の波ぢ ○波さばや ○こまぐら ○こまぐら ○舟まぐら ○みやこの舟

俊成 西行 眞淵 信敬 知紀 千尋 光琳 久秋 依平 景樹 有功 脚

万 同 同 同 同 俊拾 千 新

○うら舟 ○とまり舟 ○むやひ舟 ○朝びらき ○夕浪のなごり
 ○あさき波 ○波のたより ○うら波 ○昔まぐら ○あまの波路
 ○波風の脚 ○こまぐら ○うらねとまり ○とまりおれたる ○とまりやうこ ○こまわかれゆ
 ○一夜ならぶる友舟 ○あらし波 ○枕の下に引波 ○こまぐら ○波のうら

大君のみことかしてみ大船のゆきのまに／＼やどりそるかも
 海原にうきねせむ夜は沖つ風いたくな吹そ妹もあらなくに
 むろの沖のせとの崎なるなき島の磯こそなみにぬれにけるかも
 あはぢの野島のささの濱風に妹がむとびし紐ふさかへそ
 みやこにて山のはにみし月かげをこよひは波の上にてこそまで
 浦つたふ磯のどまやのかぢまぐらさ、もならはぬなみの音かな
 さよふけてあしの末こそ浦風にあはれ打そふ浪の音かな
 あら磯の夜舟の床はふるさとの夢もくたくる浪の音哉
 なつかしき妹が家島よそにみて室の泊に舟やはつべき
 風わらさしかまの磯の浪枕ねんがちなる秋もへにけり
 ふる里の夢はくだけてかぢまぐらかさねにかへる浪の音かな
 妹がしまかたみの浦の名をさけばうきねとだにもれもはざりけり
 大舟におるを碇のねらゐてもねられぬ夜はの雨ぞ、さかな

○別

透別 餞別

わかれ わかれをおくる 馬のはなむけ

宅麻呂 よみ人 一人 同 人麻呂 爲義 俊成 肥後 由豆 源子 秀雄 大平 千蔵 嘉言

●雑之部下 ○○旅泊 ○別 ○透別 ○餞別

八之巻六十一

かへりこんはをばいつといひおかじさだめなき身は人だのめなり
たのめおかん君も心やなぐさむとかへらんとはいつとなくとも
ゆく末の野山の露をはらふべき袂はくちぬけさのわかれに
出てゆく袖の涙のふる里をあそやくもぬのよそにしのはむ
わかれ行て又はつかりと、もにこんめづらしとおもふ人もありやと

○形見 かたみ

- わそれがたみ ○かたみの水 ○あはぬまのかたみ ○たのむ扇のかたみ ○面影の身にそふ
- 中々のおもひ ○ふくれける身は ○そのかこを ○みるたびごとじ ○ふるきあど
- あみだのかたみ ○君が、たみ ○妹が、たみ ○旅の形見 ○あき人のかたみ
- こてもーのばん ○とまるかたみ ○見つーのべど ○影だになどか ○埋れぬ名
- かたみのふみ ○形見がてら ○こる ○とりにいで、 ○おもひ出多く

真草かるあら野にはあれどもみぢばの過にし君が形見とそこし
高圓の野への秋萩ちりそね君が形見に見つ、しぬばん
なくこそゑにそひてなみだはのぼらねと雲の上より雨とふるらん
ゆく末の忍ぶ草ともなるやとて露のかたみもおかむと思ふ
なき人の形見とおもふにあやしきはるみても袖のぬる、ありけり
手ぎさびのはかなき跡と見しかども長き形見になりける哉
露をだに今は形見のふち衣あだにも袖をふくあらしかな

人麻呂
よこ人
伊勢
元輔
宮の君
土御門右女
秀能

代

○心 こころ

- よろこぶ ○うらむ ○かなし ○うらなれり ○かほる ○うるはし
- うけく ○心きたても ○くるい ○うれし ○たぬい ○うら
- おもむき ○なぐさめかたき ○まじふ ○はる、 ○定めなき ○かな
- はらさる ○心は消ぬ ○心つかひ ○むじろ ○心となさば ○むよりやば
- 心みだれん ○心のおもひ ○あはれ心 ○むぢから ○心深く ○心つかひ
- 心なぐさ ○心ぐい ○かほる ○うらむ ○はかあき ○うれひ
- おもひ ○心す敷く ○わが心 ○神の御心 ○人の心 ○おもいらぬ
- さかーく ○かーこく ○ささく ○れさき ○おろかなる

在し世はおもはざりけんかきおきてこれを形見と人しのべとは
着とむるもはかなのわそれかたみ哉見せばやとおもふ人はなき世に
ともそれは思出らる、心こそぞくしてし世のかたみなりけれ

身はそてつ心をだにもはふらさじつひにはいかいなるとしるべく
人心たどへてみれば白露の消る間もなほ久しかりけり
杉もそぎ宿も昔のやどながらかはるは人のこゝろなりけり
一方におもひどりにし心には猶をむかる、世をいかにせむ
つくくとおもへばあき世中を心となげくわが身なりけり
ふたつある物ならなくに千々にさへくだけあきは心也けり
おろかなる心もいかでおくるべき御代万代をあふぐばかりは

忠臣
成臣
成直
茂樹
長延
慈圓
同
よみ人
一み人
風

天地のわかれて遠ざかりにしへも空にはかるは心なりけり
わが心似たるものあり大空をむなしとのみも思ひける哉

芳久
景樹

○幽思 かそかなるおもひ

- かめわび ○うきみのくせ ○我をもりのお入やある ○きりまる、命 ○浅まーや
- 身のほごを ○うーにても ○ちひーる ○世を思ひーる ○よそにちひーる ○ちひーる
- わればかり ○うーち身うち ○又ありけり ○とちひーる ○ちろかなる心のち
- 世にふれば ○とりとめて ○何おもふとば ○おもひをすれ ○心のほて ○ちーかーー物と思ふ
- かきもやられ ○欺かぬ時のある ○しかたせ ○おもひやれ ○かすかた ○ゆく来
- あかうと ○袖のとぬる、 ○心とぬる ○方もーられず ○あはれなりけり ○我をがら
- 身のちさ ○うーとくそ ○おもひやる ○おもふた ○ちみた

どりとむるものにしあらねばとし月をわはれあなうと過しつる哉
おもひやる方もしられさくるしきは心まどひの常にや有らん
身のほごをしらせと人や思ふらんかくうきながら年をへぬれば
なさけ有しむかしのみ猶しのばれてながらへまうき世にもふる哉
おしかへし物を思ふはくるしきにしらせがほにて世を過まし
四方の海を視の水につくともわがおもふ事かきもやられし
いかにせむあめの下こそとみうけれふれば袖のみ間なくぬれつ、
世のちりをはらひはてけむあらしも心の内にとしをへにけり

よみ人
いらす
宗家
西行
挿政
後成
和泉式部
廣足

古 後 千 新 同 助 同

○感思 かまくるおもひ

村雨は袖にのこりて山の端の雲を夕のそらにまてぬ

有功卿

- かまくる ○心にかまー ○あはれ ○おもひーる ○うらむ ○心をよめる
- あはれとぞ思ふ ○浅まーや ○こまをりこや ○うーとち ○うき世 ○世のこと

わが身からうき世の中と歎つ、人のためさへかなしかるらむ
あはれてふことにしるしはなれどもいはではえこそあらぬ物なれ
しのぶべき人もなき身はあるをりにあはれくといひやおかまし
世をそつる心は猶ぞなかりけるうきをうしとは思ひしれども
世の中をおもふもくるし思はじとおもふも身にはおもひなりけり
うつせみの人のうへをばさげばうしわれもさながら若木ならねば
若葉ふく風もかをりて夏の日の夕かけ清きわが心かな
よしあしにうつるならひをおもふにもあやふきものは心なりけり

よみ人
いらす
貫之
和泉式部
兼宗
本院侍従
山之
巻道
蔭

○述懐 おもひをのぶ

- 千々のおもひ ○世のねがひ ○道のねがひ ○身のおこたり ○身のほご ○あなう世中
- ちひーる心 ○わりさく ○何事待とはさーに ○とりとめて ○世をいさふ
- 物ごに ○うれー ○かかー ○うらー ○つれなき世 ○わかちかり
- おもひつきせぬ ○事ーげき世 ○引入もさー ○あはれさく ○うーつらー ○思ひみだれて
- 世をさけく ○大かたの ○た々大かたに ○物おもほーき ○家の風 ○身をおこさ

●雑之部下○感思○述懐

○懷舊 往事

ふるさとふるふ ふるさとのふ

- ふるさと ○ふるさとのふ ○過るむかへ ○身のむかへ ○面影のふ ○おもかげにたう
- 遠きむかへ ○はにーへ ○むかへへ ○そのかみ ○その世 ○うの世の事
- ふりにー世 ○ふりにー昔 ○ふりにー時 ○かへりこぬ ○かへらぬむかへ ○昔がたり
- 昔とのふ ○うのむかへへ ○こゝろ人 ○もろともにみへん ○今だにかたる ○今こそ人の
- 世々の面かげ ○過る月日 ○過はてー ○みへ世も遠き ○みへ世の影 ○みへ世にもあらぬ
- 石上ふるき ○過て又こぬ ○月や昔のーるへ ○おもひひこる ○うのおもひ出 ○おもひ出は
- ふみだたのこる ○跡とふ ○跡とふ人 ○なまかげ ○むかへを夢と ○むかへへ夢に
- 夢になりぬる ○心もーぬに ○とほすがたがり ○昔おもほゆ ○古おもほゆ ○むかへへの春
- むかへへの秋

万 同 同 古 後 後 千 新 績

波の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたもあはめやも
 近江の海夕波千鳥ながなけば心もしぬにいにしへおもほゆ
 岩代の野中にたてるむとび松心もどけきいにしへおもほゆ
 あはれてふとの葉とどにれく露はむかしをこふる涙也けり
 うゑ置し二葉のまつは有ながら君か千年のなきそかなしき
 どしどしにむかしは遠くなりゆけどうかりし秋は又も來にけり
 どしをへて君がみなれしまそかみ昔のかげはとまらざりけり
 ねぎめする身を吹とほそ風の音をむかしは細のよそなき、けん
 む、しきやふるき料ばのしのふにも猶あまらる昔なりけり

黒人 人麻呂 意吉麻呂 よみ人 一ら 貫之 重之 道信 和泉式部 順徳院

六 勅

いにしへの戀しきたびにおもふ哉さらぬわかればかなしかりけり
 大空はくもら老ながらながめつ、どしのふるにも初はぬれけり
 目のまへに昔々となりゆきて今なき世こそあはれなりけれ
 いにしへのありのことくかぞふれば年と共にもつもりぬる哉
 昔おもふ老のねぎめはあかつきのためしのことくなりける哉
 御國より今も神代のま、ならんくだらのわにをめさげざりせば
 秋の夜の月にむかしのと、へば軒のしのぶの露ぞこほる、

後法性寺 よみ人 一ら 景樹 由豆 伎 章孫 技直 清義

○夢

ゆめ らめ

- ゆめのたち ○夢路 ○夢のわたり ○こころの夢 ○ふじかき夢 ○まをうし雨
- 山風 ○まつ風 ○さなる ○さやはかかかゝる ○夢てふもの ○夢のかよひぢ
- 一夜の夢 ○うき世の夢 ○世は夢なれや ○老のねぶり ○夜をのこす ○夢もくだけて
- 夢路にさぐる ○夢とのみ ○夢の世 ○見はてぬ夢 ○夢の名とり ○まをら夢
- むさぶ夢 ○夢ばかりある ○みる ○みはてぬ ○ささる ○おもはてぬ
- 夢のうち ○手枕の夢 ○ひとりねの夢 ○夢てふもの ○夢をさうかす ○ゆめをうく
- かねの音 ○とりのね ○かへ ○さちー ○夢をばかすみ ○ゆめあたり
- 長き世の夢 ○春の夜の夢 ○はかなく

万 古 後
 わきもこに戀てすへなみ夢みんとわれはおもへといねられなくに
 うた、ねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき
 かなしさのなごさむくもあらぬ夢の内にも夢とみつれば

よみ人 一ら 小町 大船

万 同 同 同 新 後拾

大どもの遠つ神祖のおくつきはしるくしめたて人のしるべく
われもみつ人にもつげむかつしかのまゝの手こながおくへき處
豊國のかみの山の若戸たてかくりにけらしめてさきなかぬ
若戸わゆる手力もがな手弱さをとめにしあればすへのしらなく
たらちねははかきくてこそやみにしかこはいづくとて立とまるらん
まれにくる夜はもかなしき松風をたねやこけの下にさくらむ
そこはかどおとひつゞけて来てみればとしのけふも袖はぬれけり
岩むろにむなしく、ゆるたきもの、ゆ、しきかにもうむ心かな
くちはてぬしるしの石もとしへなば昔の下にやさら埋れん
わかぬ浦の波路の夕日せにおひて御陵とよさへかしてかりけり
かくりまどとこつ御門に入たえていく世へにけむいでましの山
五百枝を檜の尾上の高松のみかげによれる天の下かき

○靈祭 追福 たま、つり

○なき人 ○なき玉 ○一めたり ○三めたり ○七めたり ○あかりまじ
○けふはりの日 ○十年あまり ○そのころと ○その世ののり ○ちかへり ○そのかゝ
○おくる、身 ○さきまじ如く ○かたみ ○一の身 ○は、その相 ○は、のみのち、
○袖の露 ○ひるまじまき ○名のみま、つ、 ○たかむさひる ○うら、の夢
ゆふだ、み手にさうもちてかくだにもわれは戀のむ君にあはぬかも 坂上邸女

家持 赤人 手持女王 同 順俊 俊成 悲圓 宜門 經雄 廣滋 千廣 直兄

○無常 つねなき世

みかげのみしたひく、て有明のつれなく世にもこのけけるかな
身をつくさかひはなけれ目にもぬぬみたまのためは分てつかへむ
昔の下によろこぶ君が面かげを此世ながらに見るよしもかな
その頃とおもひいつるをゆかりにて董さく野もながめられつ、
あはれわが袖さへはさぬ露のまにわかれし頃もめぐりまにけり
ちりつるもる落葉をみてもは、を原その木がらしの昔をと思ふ
うにしへにめぐりあふひの朝露をこけの下にもおもほそや君

景樹 重老 謙雄 秀雄 義豊 寛光 有功卿

- 常なき身 ○はかまき世 ○こがなき身 ○夢の世 ○あるかなきかの世
- まにか常なる ○ゆく水のかへらぬ ○長き世の夢 ○あし、らぬ ○露の身
- かへらぬ水の沫 ○稻妻 ○かりのやどり ○かりせめの世 ○あるかなきかの世
- 日かげまじつゝぬ ○あはればかなき ○あはればかなき ○あはればかなき ○あはればかなき ○あはればかなき
- つひのすみか ○つひのすみか ○つひのすみか ○つひのすみか ○つひのすみか
- 頼まれぬ世 ○頼まれぬ世 ○頼まれぬ世 ○頼まれぬ世 ○頼まれぬ世

万 同 古 拾

世中はむなしきものとしる時しいよ、まどく、かなしかりけり
こと、はぬ木さら春咲き秋つけばもみぢちちくは常をなみこそ
世中は何か常なるあそか川きのふの淵ぞけふはせになる
朝がほを何はかなしとおもひけん人も花はさこそみるらめ

大伴卿 家持 よみ人 道信

新

くる、まもまつべき世かはあだし野の末葉の露に嵐立なり
 行めぐるうき世の雲のむらしぐれつひにはぬれぬ人なかりけり
 露霜はおさかはりてもあるものを人の世ばかりはかなきはなし
 さけばちりみつればかる、春秋の花と月とぞ人の世の中
 花紅葉さそふ色かををしむ間に身の春秋もつひの夕風

式子内親王
 景之
 由之
 成章
 眞淵

○釋教 ほとけのみち

- みほとけ ○わいの山 ○こいの高根 ○鹿の園生 ○つるのはやい ○雲の山人
- 月のみかほ ○法の蓮 ○法の舟 ○法の灯 ○法の水 ○法の花
- のりの浮木 ○法のちかひ ○むねの蓮 ○衣のうちの玉 ○蓮のうてな ○彼き
- ちかひの海 ○さとり ○さとりいる ○さどりの光 ○茶つみ水くみ ○むなうとくける
- 虫もへたてぬ ○花ふる ○うるふ草木 ○法の雨 ○くるべき海 ○たからの池
- 心の蓮 ○耕つけ ○こころの水 ○三の車 ○おもひの家を出る ○誓の舟
- みだの御國 ○極樂 ○こいのうみ ○法の門 ○法のそら ○紫の雲
- あかの水 ○あか井 ○法の師 ○墨染の袖 ○墨染の衣 ○墨の衣
- 法の場 ○法の道芝 ○雲のむかへ ○二の海 ○法のまこと ○妙なる法
- 花ふる ○手向る花 ○十のさかひ ○五のさはり ○むつのおまた ○そのあかつき
- 魄をまつ ○三のころ ○十九びの御名 ○法のちから ○法の舟人 ○心の月
- 空の月 ○むねの月 ○寺 ○ふる寺 ○とてら ○かね
- かねの音 ○世をすくふ ○大寺 ○あまつかず ○空より花の ○世をいどふ

万 同 同 千 玉 同

生死の二の海をいどはしみしほひの山をしぬびつるかも
 世の中のしきかりいほにそみくいていたらん國のたづきしらせむ
 布施おきてわれはこひのむ欺きたいにはゆきて天路しらしめ
 朝毎に御法の庭にふる雪は空より花のちるかどぞみる
 わしの山むかしの春は遠けれどみのりの花は猶ほひけり
 しばしこそ人の心に濁るとも春まではずべき法の水かは
 明らかき法のともしびなかりせば心のやみのいかではれまし
 雲をおこし浪を立てはみそれどもより風の姿やはある
 ちる花に世の常なさをささる身ややがてよし野の奥も尋ねん
 ためにとてのこそ薬のなかりせば世のいたづきをいかでのぞかむ
 大空の風のかたちをみるめには土もむなしきものにざりける
 後の世を願へる人の心こそ法のはちそのつばみ也けれ
 ともしびを人のためにもか、ぐれば心のやみものこらざりけり
 ながれきてあづまに深きのりの水この行末やいづちなるらん

よみ人
 くらず
 同
 同
 清重
 時廣
 内大臣
 公雄
 公
 芦庵
 浦純
 嵩蹊
 日善
 大綱
 契沖
 眞淵

○社 社頭 やしろ

- 天の神 ○國津神 ○八百萬の神 ○八十萬の神 ○八百萬千萬神 ○神のみむろ
- 神のまらちか ○神がき ○いがき ○神のいがき ○神の宮人 ○神まつる
- 神の宮か ○洲のみあらか ○氏神 ○神がより ○そめ神たち ○大神

●雜之部下○釋教○社○社頭

- 大御神
- 四方の社
- みず垣
- 神の木根
- みーぬなほ
- 廣前
- 櫛葉
- ふとーきたて
- 庭火
- 神の心をとる
- 神のみき
- 氏子
- すがむーろ
- 神やっこ
- 神のみり
- 神のみけ
- 神のみこと
- 千々の社
- 玉垣
- 神垣の松
- いはひ杉
- 大御前
- 櫛葉のかげ
- 千木
- 八をどめ
- ひもろき
- 神の大御酒
- うぶそな
- みわそまきしる
- はふりこ
- かぐら
- 神のみわぎ
- 神のみかど
- 天つ社
- 天つ社國つ社
- 天つ神國つ神
- 八重垣
- 神垣の杉
- いはひ槻
- うつ御前
- ゆふーで
- 氷木
- まがこも
- いはざる
- さほらひ
- ゆふだまき
- かたりぎ
- かたうぎ
- 八ひら手
- ねぎ
- 玉だまき
- 豊みてぐら
- ぬさ手向て
- わさぎ
- 天つ社
- 神社
- 板垣
- 神のみたま
- とむろの鏡
- ますとの鏡
- 御戸
- 白ゆふ
- かづを木
- いはひ清む
- 神のはふり
- はふり
- 神代
- 大幣
- 神みそ
- かくり身
- 國つ社
- 川社
- 真垣
- みたまのふゆ
- 御前の鏡
- 御戸
- 白ゆふ
- 宮柱
- ともそ火
- すひぬさ
- 神の御け
- 氏入
- 神代たぼゆる
- ぬさ
- 神のみけー
- かくり世

古 同 拾 後拾

大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいづらめ
 神垣のみむろの山の櫛葉は神のみまへにしげり合にけり
 四方山の人のたからととる戸を神のみまへにけふたてまつる
 千早振神の園なる姫小松よるづ代ふべきはじめ也けり

業平
 よみ人
 同
 經衛

漸 同 風 代

千早ふるかしひの宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり
 若にむそ苦ふみならそみ熊野の山のかひあるゆく末も哉
 天つ神國つ社をいはひてぞわがあし原の國はをさまる
 ひだちなる鹿島の宮の宮柱なほ萬代も君がためと
 日のくまのりの櫛葉音信ぬふきやかよへるいせの神風
 としへぬる宮居の杉はそれをさへふしをがむべく神さびにけり
 大御神もとめ來まして御心をなくさの濱の宮あたふとし
 あまつ神國つ社はあまたあれども君を千年と守らぬはなし
 たてそむるはひろの殿や八百萬神のやしろのはじめ成らん
 神がきにたてる櫛の末かけて君をときはにいのりつるかな
 たがためとたれかおもはむ世を守る天つ社も國つやしるも
 神さびて心もそめるみたらしにうつる杉間のありわけの月

よみ人
 上 天皇
 後宇多院
 國 雅
 菅 彦
 兼 孫
 大 平
 弘 訓
 兼 廣
 豊 正
 春 満
 直 枝

伊勢 いせ

- 神の御門
- 神風の伊勢
- 御榎代
- 下つ岩根
- 内宮
- 神の大御門
- 神路山
- 心の御住
- いつきの宮
- 大御神のみや
- 内外の宮
- 千木高ーりて
- 相殿の神
- 神風のいつきの宮
- 天てらす大御神
- 天照を大神
- 天てる神
- ふた宮
- 宮柱ふとーき立
- 枝宮枝社
- 大玉串
- 宮川
- ふた大宮
- 高がやふく
- 大玉串
- 御船代
- 豊みてぐら
- 日の大御神

難之部下の伊勢

後勅代

かくてのみやむべきものか千早振賀茂の社の萬代をみむ
神山の榊もまつもしげりつ、とさばかさはのいるぞ久しき
かくしてぞかもの社のゆふかづら上をさまれば下もみたれ
神垣のみたらし川の白波のさいに、かゝる音のさやけさ
今もなほ山あゐの袖吹かへし神代にかへず加茂の川風
神代より神さびにけん大空を別雷のみづのみあらか

春日 すがか

- 春日山 ○はるびの春日 ○春日野 ○三笠山 ○三笠山をいで ○三笠山をいける使
- 松にさく藤 ○藤のうら葉 ○藤のいさび ○藤のかぎ ○藤液 ○武まかつちの神
- 經津主の神 ○天の兒屋根の神 ○ひめ神 ○天の下

三條右 重政 光俊 景樹 千隆 直見

新金後拾

けふまつる三笠の山の神ませば天の下には君ぞさかえん
三笠山神のしるしのいちじくるくしか有けりと聞ぞうれしき
けふまつる神の心やなびくらんしでに浪たつ佐保の川風
ふる雨に杉のしつこも落そひて神さびまさる三笠やまかな
大空を今もあはへる三笠山たれかかくれぬ天のした人

住吉 ともみえ ともよし

- 眞すみの位 ○すみのえの神 ○橘の小門の汝瀬に願る ○四のやしろ ○千木の行合
- 下くだるあらし人神 ○底つゝのをの命 ○中つゝのをの命 ○上つゝのをの命 ○息長たらし姫の命

筒永 實光 太政大臣 英升 翠神

同千代

住吉のあら人神の久しさにまつも幾度生かはるらん
住吉の浪にひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける
神代より津守の浦に宮ゐしてへぬらんとしのかぎりしらすも
西の海やあはさが原の浪間よりあらはれ出し住吉の神
住吉のさしの松原きてみればむかしの浪のおもかげぞたつ

日光 ふたらのみや

- 四まへの大神 ○きりの姫松 ○三笠垣のまじり ○松
- ふたら山 ○あづまてる神 ○あづまてらす神 ○世をいづめます
- 御うつかーこぎ ○御かけ ○御めぐみ ○ふたつなき功 ○うげき御かけ
- 天の下申たまふ ○御末の策 ○ものゝふの八十伴の雄 ○伴男をまごもひまゝて
- 世をまもりませ ○天の下づめ給ひー ○天下治たまひー

經信 資業 隆季 兼直 知紀

安御世と君の大御代を東照神の命ぞさためましける
世におほふ眞袖といはむ春霞ふたらの山に立そめにけり
玉くしげふたらの山の宮柱たてし御法は世々にみちめや
ふたら山ふた、び御代の動なきためしにたてし神のみやしる
下野や神のしづめしふたら山ふた、びとだに御代はうこかし

注連 しめ

- こころのしめ ○しめきは ○千尋のまいめ ○うはままいめ ○まいめ ○まいめきは

宜長 枝直 永章 利和 眞淵

●難之部下○春日○住吉○日光○注連

○ひくくめ ○一めゆふ ○一めはて ○八重の一め繩 ○日の御綱 ○一りくめなほ
○ひく ○かき ○ちすぶ ○ゆふ ○かくる

万 はふりらがいはふ社のみみち葉もしめなはこえてちるとふものを
みづがさにかくるしめなは打はつて世はのどかなる神風ぞよく
山本の苦むそ若にしめ引ていませばかりそ神さびにける
此もりは神ましけりなかく深くしげれる松にしめはつて見ゆ
よみ人 春 契 原 門 庵
一ら 沖 庵

○木綿 ゆふ しで

○白髪つくゆふ ○一ちゆふ ○淡の白ゆふ ○ゆふ一で ○八重のゆふ一で
○神のゆふ一で ○御戸のゆふ一で ○具そゆふ ○み一まゆふ ○ゆふあつち ○ゆふだまき
○白ゆふ ○花のゆふ一で ○みにかゆふ ○白にきて ○背にきて ○なびく
○かくる ○櫛葉にかくる ○ちよや

万 糸 勅 万 ゆふかけてまつるみむろの神さびていむにはあらま入目多みころ
霜入度おけきみどりの榊葉にゆふしでかけて世を祈るかな
ゆふだまきむとぼ、れつ、敷く事たななば神のとくと思はん
みそぎせし神の昔ぞねもほゆるあはぎが原の浪のしらゆふ
よみ人 思 道 道 男
一ら 成 綱 母 男

○幣 みてぐら ぬる

○みてぐら一ち ○豊みてぐら ○大ぬき ○麻ぬき ○麻の大ぬき ○ぬきの追風
○ぬきをりむけて ○ぬきたまひりる ○ぬきたまふる衣 ○ぬきをりて ○ぬきむけて ○ぬき

新 ○手向るぬき ○大ぬきのひくて ○ぬき一ち ○ぬき袋 ○切ぬきちらす ○染ぬき

神風や豊みてぐらになひくしでかけてあふむといふもかまこし
みどしいはふ廣瀬立田のみぬさには神のこゝろも打なびくらし
君が代を安みてぐらとまげもて神のみや人神まつるらし
太上天皇 依 平 彦 彦

○神祇 かみ

○あめの神 ○國の神 ○天つ神もろく ○くにつ神もろく ○天地の大御神たち
○天つ神 ○國つ神 ○天つ神 ○國つみ神 ○天つ社 ○國つ社
○天つ御祖神 ○天つ神ろぎ ○神ろぎ神ろみ ○遠きめろぎの神 ○皇神等 ○皇神
○遠つ神 ○遠さはふ神 ○千早振神 ○八百萬の神 ○千萬神 ○八百萬千萬神
○も、千萬の神 ○神ろぎ ○神ろみ ○神あがら ○神さび ○神わき
○神のみ一わき ○神事 ○神風 ○神のいぶき ○神の心 ○神の御心
○神が、り ○神はらひ ○神やちひ ○神あそび ○神やち ○神とまき
○神たゝます ○神にしませぬ ○神ならぬ身は ○神ぞーるらぬ ○神の御心 ○神の御末
○神のむさび ○神のちばひ ○神の幸ひ ○神にこひむ ○神にうつへ ○神づまり
○神づまりまき ○神の光 ○神の御まじり ○神のくさ ○神のたまき ○神のみたまの冬
○神まじり ○神のみまじり ○神の御手代 ○神代 ○神の御代 ○神の大御代
○神のつく ○神のみまへ ○高みむすびの神 ○神もまびの神 ○ちまふの神 ○まいかひ彦彦の神
○天の御中主の神 ○天の常立の神 ○國の常立の神 ○伊弉那岐神 ○伊弉那美神 ○二柱とあやの神 ○男女二柱の神
○天てらすひるめのかみ ○もさのぞの神 ○大名持の神 ○少彦名神 ○少年御神

古 同 後 拾

千早ぶる神のきりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり
わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめ置てば思ひ出にせよ
百年をいはふぞわれはき、ながらおもふがためはわか老を有ける
たが年のかきどかはみむゆきかへり千鳥なくなる濱の眞砂を
植きて友と契れる庭の松うからやからの千代もともなへ
君が代を一年ことにもち分て八百萬てふ神をまもらん
あしたづの翅やをむる松がえのかさなる千代をたれかみざらん
君がへむ千世のたよりを今年よりくもはるかに待わたるかき
君が代にこもれる千世はあるものを松のみとしもおもひける哉
朝なくむかふたらひのみづ鏡かはらぬかげにまをものすなき

○四十賀 よそぢの賀

○くれ竹のよそぢ ○よそとせせ ○ようぢへたけり ○さ、竹のよそぢ ○老のほじり
○老の山口 ○老むむる ○老らくのことといふなる ○老のさかゆ
櫻ばなちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふがに
万世をまつにぞ君をいはひつる千年のかげに住んどおもへば
万世をけふよとせせどかぞふればのこりはるけき君が御代かな
老らくのこむてふ春は道かへて花のしをりをたどらざらん
未つひに千代も八千代もならびえよことしを老の難波津にして

暹 羅 同 賈 英 隆 智 三 眞 有 功 脚
よ かん 一 ち ら ず
之 好 正 信 冬 淵 淵 脚
平 性 盛 海 歌

○五十賀 いそぢの賀

○梓弓のよそぢ ○もたらすよそぢ ○さねり ○さねり
○さうへ ○百年のよかぢ
いたづらに過る月日は多けれと花見てくらと春ぞ少き
千年へむ君しいまさらばとべらぎの天の下こそうしろ安けれ
千世ふべき濱松が根によせかへるいそのしら波かきぞまらぬ
花鳥も君がたのしむも、年のなかばの春にあひにけるかな
も、年のなかばは過ぬと藤かづら千代をまつにやか、り利らむ
君が代どはるけかりける三千年になるてふも、のなかばと思へば

興 元 千 景 長 千
風 輔 蔭 樹 廣 橋

○六十賀 むそぢの賀

○むそぢ ○むそぢの老 ○わかきにかへる ○老わすらる、 ○そのかみにかへる
○むかへにかへる ○みどりこの昔 ○わかぢ
つるかめも千年の後はしらなくにあかぬ心にまかせはて、
もろ人のよるこび來まを六十をばはこやのみよのなかばとぞきく
六十をば何よろこびとおもふらん千世かさぬべき君とこそみれ
みどりこのむかしの春に立かへりいく春秋もきつ、ならさん
ふそま山の小山の若なへわかえつ、在へむ千世の數にとらばや
も、づたふ六十を千世のはじめとば君へて後ぞしるべかりける

遊 静 賈 源 方 季
香 賈 雲 子 郎 歴

○七十賀 な、そぢの賀
千 隆
子日する野への小松のみどり子に立かへるけふや千代の初春

古新月
かくしつ、どにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな
仁和御製
な、そぢにみつの濱松老ぬれど千代の、こりはなほどはるけき
清 輔
七十にみちぬるしほをまちつけて千年つむべき舟よそひせり
顯 昭
たゆみなく七十までもつかふるをまれなりけりと神もうくらん
景 樹
十づ、をまだ七わたの玉の緒にちりのよはひもぬきやとむらむ
尚 忠
露ばかりうき事さかでいにしへもまれなりとさくよとへぬる哉
千 隆

○八十賀 やそぢの賀
千 隆
○釋のやそ 〇妻ももるやそ 〇八十の春 〇八十もゆたに 〇八十も安くとゆ 〇八千代もへきん
かすふれば八十の春になりにけりしめの内なる花をかざして
成 伸
君ぞみむ八十の春を過し來て猶もながらの山のさくらさ
高 正
千代までもといのる心に八十へし君を老ともおもはざりけり
千 隆
きの川や八十瀬のされ千代をへていははとならば君をなづべき
千 隆
いつとなく千年の坂もこねぬべし八十のちまたを意らきゆけ
重 老
百傳ふ八十島山のまつかきもけふより千代のことよばふらん
千 隆

勅月
八千代までもちぎれる枝はも、年に近づく君がよはひとぞおもふ
有 衛
も、年のちかづく坂につまそめて今ゆく末もかくれどぞねもふ
景 樹
いつまでもふりしく雪のつくもがみくどくる世しらぬこしの白山
景 樹

○九十賀 こ、のそぢの賀
〇百年のちかづく 〇百年も程遠からむ 〇百年もちかくなる 〇百年ちかきよはらむ
〇うき世に 〇うきもがみ
八千代までもちぎれる枝はも、年に近づく君がよはひとぞおもふ
有 衛
も、年のちかづく坂につまそめて今ゆく末もかくれどぞねもふ
景 樹
いつまでもふりしく雪のつくもがみくどくる世しらぬこしの白山
景 樹

○新婚 とつぐ
〇相生の松 〇むすぶ契 〇うき世の中 〇相うるはし一か 〇うるはし一かや〇うき世
〇むすぶに 〇うき世に 〇むすぶは一〇うき世に
朝もよし木の川のべにむつまじくさかたてたてゐるいとせの山
雄 子
老松もうれしとやみまらしくてねむらさだめし千代の友鶴
景 正
むつまじくさかたてゐるはにしにならひつ、齡はたづの千代にあえなん
之 正
万代にか、れとてこそ久かたの天の御はしらめぐりそめけん
土 満

○新宅 にひむろ
〇新むろ 〇つくれる家 〇萬代までた 〇とどに住入き 〇住まむる 〇住まむる
はたら、き尾花さかぶき黒木もてつくれる家は萬代までに
元正天皇
ひだ、くみうつ墨繩のながらへて八千代いませとつくる新室
枝 直

万
〇新むろ 〇つくれる家 〇萬代までた 〇とどに住入き 〇住まむる 〇住まむる
はたら、き尾花さかぶき黒木もてつくれる家は萬代までに
元正天皇
ひだ、くみうつ墨繩のながらへて八千代いませとつくる新室
枝 直

●雜部下〇八十賀〇九十賀〇新婚〇新宅

新じろの朝けのけぶり立をめぐむかひの松の千代にくらべん
まどの内にまづさしいれてうれしきは千代のはじめの月日也けり

千 坐
有 功 卿

明治廿五年六月七日印刷
同 廿五年六月十日出版

和歌字比未奈飛

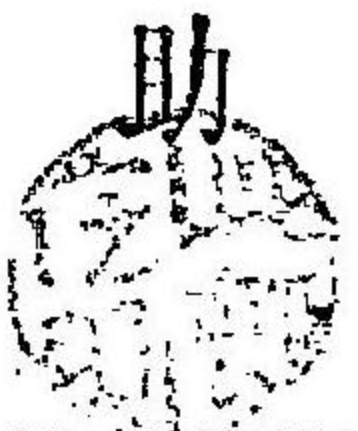
故人

著 者

鈴木重胤

發 行 者

大阪市南區順慶町通四
丁目百七十九番屋敷
此 村 庄 助



弘業館藏版

印 刷 者

大阪市西區鞠下通一丁
目四十八番屋敷
瀬 戸 清 次 郎

弘業館藏版賣捌所

大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百四十二番屋敷

田中 太右衛門



同 南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷

中 村 芳 松

同 東區北久寶寺町四丁目卅五番屋敷

濱 本 伊 三 郎



同 東區北久太郎町四丁目百廿八番屋敷

岡 本 仙 助

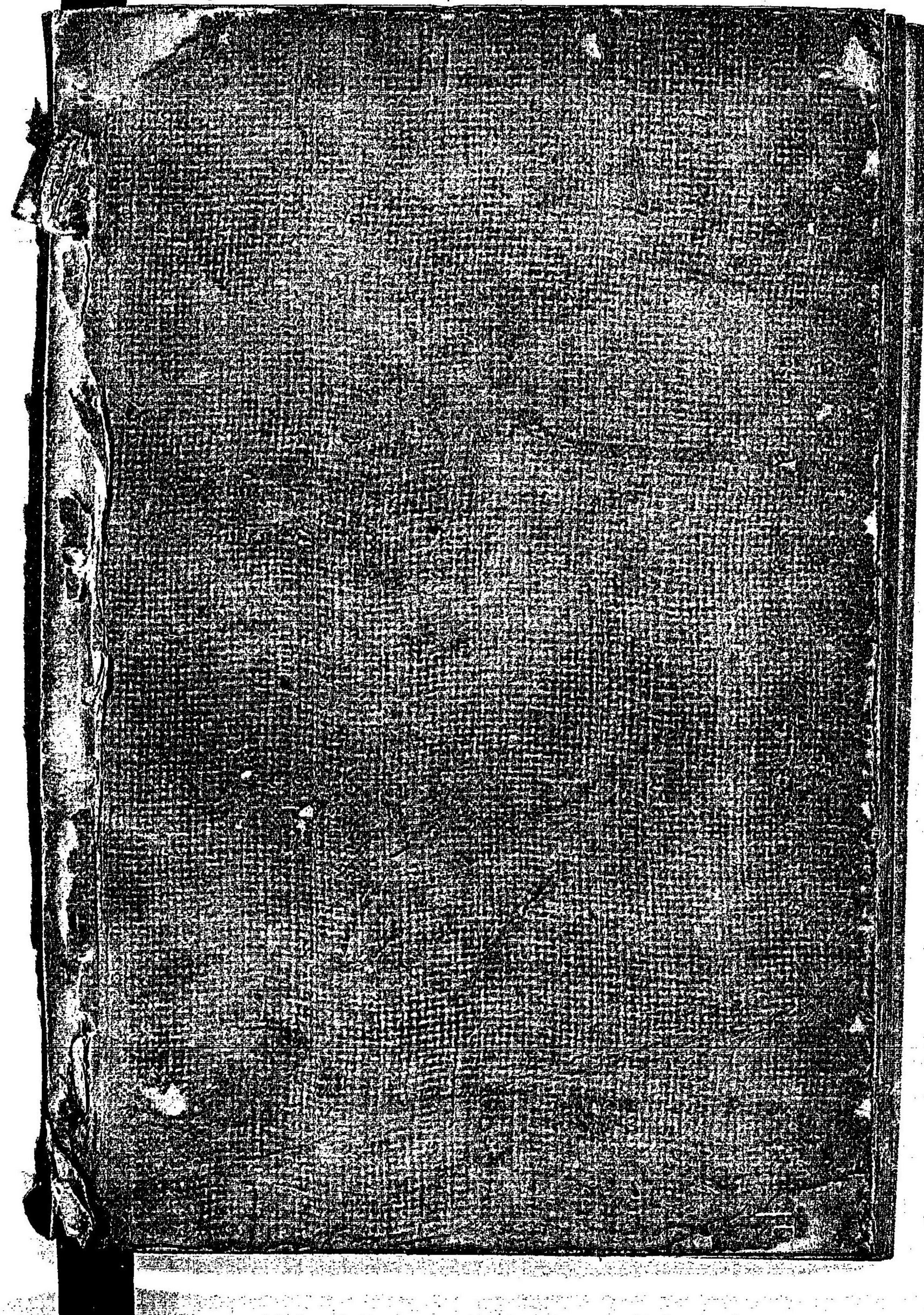


同 南區順慶町通四丁目百七十九番屋敷

此 村 庄 助



32
2
63



特 71

840

301423-001-9

特 71-840

古今和歌字比末奈飛 下

鈴木重胤 / 編

M25.6

DBD-0001

